

アレクサンドリアのフィロンの夢類型  
— ストア主義および神秘主義的文脈における再検討 —

津田謙治

## 1. 問題設定<sup>1</sup>

2 世紀以降に著された『ヘルマスの牧者』のような使徒教父文書や、『聖なるペルペトゥアとフェリキタスの殉教』などの殉教者文学において、夢で表された幻は、それぞれの著作全体に関わる神学的事柄や著者の行動原理の基盤の一部を形成し、重要な意味を担っていた。新約文書に目を向けるならば、使徒言行録の複数の箇所において、パウロが夜に見た幻が、宣教の場所の選択に関わるなど、彼の行動の指針となったことが記述されている（使徒言行録 16：9、18：9、23：11、27：23-24）。これに対して、恐らくこれらの文書以前に記述されたパウロ自身に関連する書簡や福音書などでは、確かにマタイ福音書ではヨセフへの夢のお告げが複数の箇所で語られているものの（マタイ福音書 1：20、2：12、2：19、2：22）、福音書全体として夢が神学的主題に積極的に関わるような位置を占めることは殆どないように見える。イエスは夢で見た幻を福音として告げ知らせることはせず、またパウロは夢のお告げを神学的主題に関連付けることは基本的に行わなかった<sup>2</sup>。

他方で、イスラエルの聖書は、恐らくその文書としての成立過程が新約文書よりも複雑かつ長期に亘ったことも反映して、夢に関して様々な見解が散見される。創世記において、父祖たちは夢において神と関わりをもち、またファラオが見た夢を解釈したことによってイスラエル民族全体の命運が決定付けられた出来事が記述されている一方で、預言者や諸書では夢と預言を安易に結び付けることに対する警戒が明確に述べられている（典拠については後述）。イスラエルの聖書では、夢が両義的な意味合いを包含しつつも、それが大きな影響力をもちうるという点は共有されており、一定の意義を常に保持していたことが推測される。

本稿では、このような諸文書の状況を踏まえた上で、新約文書の成立期にユダヤ教徒がどのように夢に関する聖書の箇所を理解しようとしていたかを分析する。その際、考察の手掛かりとするのは、ヘレニズム思想の影響を強く受けつつ、聖書解釈的著作を多数書き表したアレクサンドリアのフィロン（前 20 頃-後 50 頃）の夢理解である。イエスと重なる時代に活躍したこの人物の議論を考察することによって、最初期のキリスト教共同体の周縁におけるユダヤ教の夢概念理解の一端を検討することを試みたい。

## 2. フィロンの『夢』

主として西暦 1 世紀のアレクサンドリアで活躍したユダヤ人フィロンは、上述の聖書解

積的著作だけでなく、政治的また哲学的著作を数多く残している。彼が註釈を施した聖書の箇所は、その殆どがモーセ五書、特に創世記に集中しているが、自らの解釈の補論として、現在我々が目にするかたちの預言書や諸書からも引用を行っている。尚、彼の聖書解釈に関連する著作は、その執筆意図や読み手の志向によって大きく三つに分類することが可能である。それは、(1) 聖書的知識をそれ程多く前提としない一連の律法註解書の類、(2) ある程度の聖書的知識を前提として読み進めることが可能な、聖書箇所を問答形式で考察を加えた類、(3) そして恐らく初学者ではなく高い水準の知識をもった読み手を対象とした聖書の寓意的解釈の類である<sup>3</sup>。彼が創世記における夢を主題として論じた著作『夢 (de somniis)』は、上述の三つ目の分類にある一連の寓意的解釈の中に位置づけられる。この書は、読み手に対して聖書の詳細に至る知識だけでなく、神話や哲学の議論を踏まえていることが前提となっており、また一つの主題を原則的に聖書の記述の順番で論じ進めているものの、関連する議題を方向性の不明瞭なまま無秩序に展開させていく傾向がある点で、その読解は極めて難解な側面をもっている。

尚、4世紀のカイサリアのエウセビオスは『教会史』の中で、フィロンが『モーセに拠る神から送られた夢について (Περὶ τοῦ κατὰ Μωυσῆα θεοπέμπτους εἶναι τοὺς ὀνείρους)』という主題で全五巻の著作を書いたとしているが(『教会史』2,18,4)、現在我々に残されているのはこの内の二つの巻のみである。これから見ていくように、現存する最初の方の巻の冒頭で、フィロンが以前の巻について述べていることから(1,1)、我々の手元に残されているものが第二巻と第三巻である可能性が高いとされる。その根拠の一つとして、後述する夢の三類型が関わっており、第二巻の冒頭の記述から、失われた第一巻では神から(直接)送られた夢(第一の類型)について扱われており、その後第二、第三の類型がそれぞれ第二巻と第三巻で論じられていると考えられている。その場合、エウセビオスが指摘する全五巻の残りの二つの巻が、第一巻の前に来るのか、第三巻の後に来るのか、それぞれ一巻ずつ前後に来るのか不明となるが、これについては結論付けるための十分な手掛かりはない。現存する巻では三つの類型が繰り返し論じられているため、エウセビオスの報告の誤りか、彼の巻の数え方の相違として、最初から全三巻であったと見做されることがある<sup>4</sup>。

本稿では、現存する『夢』から夢の三つの類型を可能な限り分析したのち、多くの学者が指摘するストア主義における夢の三類型との関連性を検討し、さらにこの著作『夢』以外の夢概念に関わる議論との関係を考察した上で、フィロンの議論の位置付けと展望を短く述べてみたい。

### 3. 第一の類型 (失われた『夢』第一巻)

ここでは、フィロンが捉えた夢の三つの類型を概観したのち、その第一の類型の特徴を考察してみたい。まず、神から送られた夢の三つの類型のうち、第一と第二の特徴について、現存する第一巻では次のように述べられている。

本書〔現存する第一巻、即ち本来的にはフィロンが第二巻として執筆したと思われるもの〕の前の文書〔失われた(本来の)第一巻〕は、神から送られた夢のうち〔τῶν θεοπέμπτων ὀνείρων<sup>5</sup>〕、第一の類型〔τὸ πρῶτον εἶδος〕に当て嵌まるものを含んでいた。それは、既に述べたように、神的なものが自ら投げ掛けることによって眠りの中で幻を送るものであった〔τὰς ἐν τοῖς ὕπνοις ἐπιπέμπειν φαντασίας〕。本書では、可能な限り第二〔の類型〕に当て嵌まるものを明らかにしよう。第二の類型は、そこにおいて我々の精神〔ὁ ἡμέτερος νοῦς〕は万物の〔精神〕と共に活動するのであるが〔τῷ τῶν ὅλων συγκινούμενος〕、自身を失って取り憑かれたような、神懸かったように〔θεοφορεῖσθαι〕見えるものであって、そのため、未来に関わる事柄を先取りし、予見することができるものである〔προλαμβάνειν καὶ Προγινώσκειν τιτ ὦν μελλόντων〕。(アレクサンドリアのフィロン『夢』1,1-2<sup>6</sup>)

ここでは、夢の第一の類型は、神が睡眠中の者に対して直接、幻として見させるものであり、これに対して第二の類型は、眠っている者の精神が神自身ではなく万物の精神と共同で見る夢を指しているとされている。これらの区別を踏まえて、現存する第二巻の冒頭では、第三の類型も含めて以下のように記述されている。

神から送られた夢の第三の類型〔Τὸ τρίτον εἶδος τῶν θεοπέμπτων ὀνείρων〕を叙述するにあたって、我々は適切にもその援助としてモーセを〔ここに〕呼び出そうと思う。それによって、モーセが自分の知らなかったことを学んだように、〔聖書の〕徴に関するそれぞれについてモーセは我々を教え、光を照らしてくれるであろう。さて、第三の類型は、眠りの中で魂が自らを失って活動し〔ἐν τοῖς ὕπνοις ἐξ ἑαυτῆς ἢ ψυχῆ κινουμένη〕、狂乱的かつ熱狂的な状態になり、予知する力によって〔δυνάμει προγινωστικῆ〕未来のことを告げることで成り立つものである。すなわち、第一〔の類型〕は、神がその運動を開始し、我々には知られていないがこの方が知っている事柄を目に見えないかたちで吹き込むものである。そして第二〔の類型〕は、我々の思惟が万物の魂と共に活動し〔τῆς ἡμετέρας διανοίας τῆ τῶν ὅλων συγκινουμένης ψυχῆ〕、神の靈感を伴った熱狂によって満たされ〔θεοφορήτου μανίας ἀναπιπλαμένης〕、多くのこれから実現する事柄を予言すること〔προαγορεύειν〕ができるものである。(アレクサンドリアのフィロン『夢』2,1-2)

現存する第一巻で見た第一と第二の類型の区別を若干異なったかたちで説明したのち、ここでは第三の類型が、眠っている者の魂がある種の脱自的状态になりつつ見る夢であることが指摘されている。

夢そのものがすべて神から来るものなのか否かに関する議論がここでは欠けているが、いずれにせよ、ここで議論の対象となっている夢は、すべて神によって送り込まれたものと

されている。そして、それが純粹に神自身によって幻としてかたちとなるものが第一の類型であり、万物ないしは世界靈魂のような、神と人間との間の中間者的存在と、睡眠している者とは共同で見る夢が第二の類型とされ、最後に、眠っている者が自身で見る夢が第三の類型と見做されている。したがって、この類型には神的なものから中間的なものを通して地上的なものへ至る階層的・従属的な関係が見出され、これらの類型に従って、創世記に記述された複数の夢がそれぞれ分類されていると言える。

本来であれば、ここで第一の類型から順に、フィロンの議論を分析する必要があるが、既に前節で確認したように、「本来の第一巻」は欠落しているため、いずれの夢をフィロンが第一の類型で論じていたかは不明である。しかしながら、我々に残された（恐らく本来の）第二、第三巻の議論や、関連する彼の他の著作が扱う範囲から、ある程度推論が可能な部分がある。フィロンには、一連の寓意的解釈の著作があり、それらは創世記の記述の順序で題材を扱っている。そのうえで、本書（『夢』）の前作として位置づけられる著作が、創世記に従ってアブラハムに関する議論を展開する『改名』であるとすれば、失われた『夢』の第一巻は創世記 17 章から、本来の第二巻（現存する第一巻）の始まる創世記 28 章の前までが範囲となる<sup>7</sup>。その中で題材となりうる父祖はアブラハムの子イサクであるが、聖書の記述に拠れば神が直接現れる夢を見たのはイサクではなく<sup>8</sup>、創世記 20 章のゲラルの王アビメレクであり、この人物は少なくともイスラエルの父祖ではない。この議論の方向性を検討するためには、恐らくこの著作『夢』における他の議論をも手掛かりとする必要があるため、ここでは詳細の分析を一旦保留し、『夢』の第二、第三の類型を先に概観してみたい。

#### 4. 第二の類型（現存する『夢』第一巻）

神から送られる夢の第二の類型は、万物の精神や魂として表現される、神と地上との中間者的存在と人間の魂が協働することによって見るものとされている。ここで取り上げられている夢は、創世記 28 章におけるイサクの子ヤコブが伯父ラバンのいるハランに向かう途中で見た夢と、31 章におけるヤコブが伯父の許を去って親族の地に帰還するように命じられる夢である<sup>9</sup>。

28 章の夢では、後にベテルと呼ばれる場所でヤコブが眠ると、地上から天に伸びる梯子と、それを上り下りする神の天使たちが現れたとされる。そこで、彼は主から自分が神の祝福を受け、神がハランまでの道中を見守ってくれることを告げられている。31 章の夢では、ヤコブが伯父ラバンと羊の群れと財産を巡って確執が生じる中、神の天使が現れ、ハランを去るように命じられる<sup>10</sup>。いずれもヤコブが見た夢であり、またそこでは天使が夢の内容に関わっている。フィロンは、中間者との関わりの中で見る夢を第二の類型として捉えており、第二の類型の説明で用いた万物の精神や魂という表現が、ここで天使を指していることが分かる。事実、フィロンはこの中間者を「大天使 [τὸν ἀρχάγγελον]」(1,157) や「神のロゴス [ὁ θεῖος λόγος]」(1,190) と述べており、これらの諸概念は神と地上の事物をつなぐ役割

を担っている<sup>11</sup>。また、特に 28 章の夢では、天使と梯子の顕現の場所に主である神が顕れたと記述されているが、フィロンはこの「主」を上述の「大天使」に置き換えて理解している (1,157)<sup>12</sup>。

尚、この第二の類型は、第一の類型と比較して、神から送られる夢の内容が不明瞭であるとされており (2,3)、第三の類型は「さらに不明瞭である [μᾶλλον... ἀδηλούμεναι]」(2,4-5) ことが語られている。その不明瞭さは、謎掛けや夢解釈と関係する。

## 5. 第三の類型 (現存する『夢』第二巻)

神から送られる夢の第三の類型は、夢見る者の魂それ自体によって幻を見るものであって、それはある種の狂乱的状态を伴うが、未来に起こる事柄を見ることありうるとされている。ここで取り上げられている夢は、創世記 37 章におけるヨセフが見た麦の束の夢、および星辰の夢と、40、41 章におけるヨセフと同じ牢獄にいた囚人たちがそれぞれ見た夢、および彼らが仕えていたエジプトのファラオの見た夢である。

37 章の夢では、ヨセフとその兄弟たちが畑で麦を束ねていると、兄弟たちの束がヨセフの束にひれ伏し、また別の時には、太陽、月、十一の星々がヨセフにひれ伏す内容が語られている。そして、40 章の夢では、エジプト王に仕える献酌官と調理官がそれぞれ獄中で自分の仕事に関わる三つの事物が不思議な事柄を起こす内容が語られ、また 41 章の夢ではファラオ自身が見た七頭の家畜と七つの穂が奇妙な現象を起こす内容について述べられている。夢を見ているのは、37 章ではヨセフであるが、40、41 章では非イスラエル人であるエジプトの民と王となっている。これらの夢は、結果的に未来を予告する内容を表しており、ヨセフはエジプトの宰相に上り詰めた後、両親と兄弟は彼にひれ伏し、また献酌官と調理官はそれぞれ三日後に釈放<sup>13</sup>と処刑という真逆の出来事が起こり、最後にファラオの治めるエジプトでは七年の豊作とその後の飢饉が起きることになった。

既に見たように、フィロンは魂自身が見る幻として、これらの夢を第三の類型に分類しているが、確かにここでの夢には神自身や天使などの中間者が関わることなく、これまでの類型とは別の状況のものとなっている。また夢が包含する意味内容が謎めいたもので不明瞭である点も、フィロンが指摘する通りであるが、これらの夢は謎掛けと同時に未来の予言的内容を含んでおり、それは夢を見た者自身ではなく、それを後から聞いた別の者が夢を解釈して聞かせるかたちになっている。例えば、37 章の夢は、ヨセフが見た後、父ヤコブがその夢を解釈し、太陽、月、十一の星々が、ヨセフの父、母、十一人の兄弟を指すと説いており、また 40、41 章のエジプト人が見た夢は、神の与えた知恵に従ってヨセフがその夢を解釈すると聖書の中で記述されている。

## 6. ストア主義における夢の三類型

ここまで分析してきたフィロンの夢の三つの類型は、キケロ（前 106-43）が引用するポセイドニオス（前 135 頃-51 頃）が説いたとされる夢の三類型との関連性が度々指摘されている<sup>14</sup>。キケロは、『占い（De divinatione）』の中で複数の思想家における夢に関する記述を引用しているが、眠りや死に臨む人において魂と身体との繋がりが弱くなった際に、靈感をもちやすくなる例について挙げている。その際に取り上げられているのが、中期ストア主義の代表的な思想家の一人とされるポセイドニオスであり、この人物は神的な夢について三つの類型があることを述べたとされる。

〔ポセイドニオスは〕神々の靈感を受けて〔deorum adpulsu〕人間が夢を見るのには〔homines somniare〕三つの在り方があると述べている。第一の在り方は、魂自身が〔animus ipse〕神々と密接な関係を保持しているために、魂がそれ自体によって見るものである。第二の在り方は、大気が、あたかも真理の徴を付けられたような不死なる魂によって満たされることによって〔plenus aër sit immortalium animorum〕見るものである。第三の在り方は、神々自身が眠っている者たちと語り合うことによって〔ipsi di cum dormientibus conloquantur〕見るものである。そして、ちょうど私が述べたように、死に近づくと、魂が未来を予言すること〔ut animi futura augurentur〕が容易になるのである。（キケロ『占い』1,64<sup>15</sup>）

この引用でまず確認しておくべき点は、ここでは神的な夢について論じた箇所が引用されているが、ポセイドニオスがその他のかたち、例えば、神と無関係なかたちで見られる夢について、どのように捉えていたかはここでは判然としないということである。この点については、フィロンも状況は同様である。その上で、神的な夢については、人間自身が見る夢、大気を満たす魂<sup>16</sup>による夢、そして神と直接接触をもつ夢の三つがここでは語られており、表現と順序は異なるものの、フィロンの神的な夢の三類型と対応していることが見出される。しかし、確かにこの箇所だけを見ると強い関連性が指摘できるものの、ストア主義における夢概念について、他の資料に体系的な議論が残されている訳ではなく、またポセイドニオスの夢概念に関する資料も主としてこのキケロの引用部分だけに依拠しているため<sup>17</sup>、ストア主義全般とフィロンの議論を詳細に分析することは困難が伴うと言える。

これに関連するかたちで、フィロンにおける夢の三類型は、ストア主義など近い時代の哲学の影響関係を認めつつも、神から地上的世界に至る階層的秩序を描き出す彼自身の議論の一部と見出すことも可能である。フィロンにおいては、別の著作『モーセの生涯』において、神の預言についても神的、問答的（神的なものとの協働的なもの）、脱自的（預言者自身によるもの）という三類型があり<sup>18</sup>、またこの『夢』において<sup>19</sup>、場所概念についても神が満たす場所、中間者のロゴスが満たす場所、被造物の物体が満たす場所という三類型が説かれており、彼の説く夢はこのような構造的な理解に対応しているとも捉えられうる。

他方で、このような階層的秩序を前提として、夢は被造物の最も低い次元から神的なもの

に近づくための神秘主義的な構造を表そうとしていると理解する可能性も指摘されうる<sup>20</sup>。魂の不完全な状態において、夢は謎めいた、不明瞭なかたちで幻を映し出し、適切な夢解釈を必要とする。しかし、徳が完成に向かうに連れて、明瞭なかたちで見るのが可能となるのであり、その最も完成した状態では、夢は神意をそのまま映し出すと想定される。このような神秘主義的な夢類型に立脚するならば、第三の類型に分類されるヨセフは徳的に最も不完全であり、事実、この『夢』という著作の中ではヨセフがそのような人物として理解されている<sup>21</sup>。ヤコブは第二の類型に当て嵌まるため、ヨセフの上位に位置付けられるが、問題は第一の類型に当て嵌まる最上位に誰が来るのかという点になる。フィロンの著作全体を通じて、徳の最も優れた人物にふさわしいのは恐らくモーセであるが、モーセは創世記では登場せず、ここに当て嵌めるのは困難である。既に指摘した第一の類型の条件として、創世記 17 章から 28 章の間で議論される人物としてイサクがおり、父祖の中では彼のみが自ら学ぶことのできる [αὐτομαθεῖ] 観想的な生を体現する人物と見做されている (1,167-169)<sup>22</sup>。したがって、フィロンの夢の三類型を神秘主義的な構造の中で捉えようとする議論の中では、第一の類型に当て嵌まるのはイサクが最も相応しいとされるが<sup>23</sup>、聖書の該当箇所ではイサクは神の現れる夢を見ておらず<sup>24</sup>、そのような夢を見ているのは徳とは無関係なアビメレクという異邦人の王である<sup>25</sup>。神秘主義的な構造は、夢の意義と寓意的解釈の内実として極めて興味深い議論を提示してくれるが、イサクが実際には神による直接的な夢を見ていない点と、アビメレクのような人物が神による夢を見ている点を説明することは非常に困難である。

## 7. 創世記以外の聖書箇所に関するフィロンの議論

創世記において、父祖たちが夢において積極的に神と関わる点が記述される一方で、本稿の冒頭で触れたように、聖書の別の箇所では、夢が場合によっては否定的な文脈で述べられているのが散見される。ここでは律法、預言書、諸書の中から複数の箇所の記述を取り上げ、フィロンが依拠したと推測される七十人訳聖書の文章と、フィロンの立場を検討する<sup>26</sup>。

まず、律法の民数記において、夢は神が預言者に語る媒介として捉えられていることが確認される。神は、主のための預言者に対し、幻の中で自らを知らしめ、夢の中でこの者に語り掛けるとされているが、ここで重要な議論はこの後に続く箇所であり、そこでは神の忠実な僕モーセに対してだけは、神が面と向かって直接的に語るとされている (民数記 12:6-8)。即ち、モーセ以外の預言者は、間接的なかたちでしか神の言葉に与ることはできず、夢はその仲介の役割を担うと見做されている。フィロンは、この箇所について『神のものの相続人』(262) と『律法の寓意的解釈』(3,103) の二つの著作の中で触れているが、双方において、フィロンはモーセの卓越性について論じているものの、神と預言者との媒介としての夢そのものに関する議論は展開されていない。ここでの聖書箇所は、神が対面で語ることの従属的位置付けとして夢が置かれていると理解されうるものの、現存するフィロンの著作

からはそのようなものとして夢を理解しているようには見えない。他方で、申命記においては、預言者や夢占いが不思議な業を用い、言葉を語り掛けたとしても、安易にその言葉に従うべきではなく、警戒すべきであって、それを聞く者を神が試していることを念頭に置かなければならないと述べられている（申命記 13：1-3）。この箇所について、フィロンは『律法詳論』（4,143-147）の中で、人間の神への態度全般についてのより広い文脈において触れているが、夢や夢占いに対する警戒感を共有しているようには見えない。

他方で、預言者のエレミヤ書において、偽りの預言者が夢を見たことについて語り、そのような偽預言者に対してエレミヤが毅然と立ち向かうことを述べた箇所がある（エレミヤ書 23：23-32）。フィロンは、僅かではあるものの、エレミヤ書にも触れているが、この箇所について論じた文書は我々に残されていない。また、七十人訳聖書に収められていたとされるシラ書の中では、夢は虚しいものとして論じられており、夢は見る者に幻を与え、虚偽を映し出し、真理の道から人々をふるい落とすものと見做されている（シラ書 34（31）：1-8）。フィロンは、シラ書にも複数の書物の中で触れているが、この箇所についての彼の議論もまた残されていない。

フィロンの著作は全てが残存するわけではなく、また本稿で扱った『夢』のように、残存していてもその著作の全体が残されているとは限らないため、ここでの考察は部分的なものとなることは避けられない。そのうえで、現存する彼の著作を分析する限り、聖書中に見られる夢や夢占い師への警戒に関する議論を、フィロンが共有している箇所は見出されず、むしろ彼にとって理想的なユダヤ教の宗教的生活を送るセラペウタイが夢の中で神の徳が現れ、夢に従って神に関する教説を説くことについて触れていることから（『観想的生活』26）、そこに肯定的な側面を見出していることが窺われる<sup>27</sup>。

## 8. 結論と展望

本稿では、フィロンにおける夢概念の三類型を分析し、神と地上的世界を結ぶ媒介として夢に積極的意義が付与されていることを確認した。フィロンの夢に関する解釈を位置付け、また新約文書成立期の夢概念を複合的に明確化するために、現在進行中の共同研究の成果と視野を取り入れると共に<sup>28</sup>、ラビ文学や教父の文献との比較を行うことで、より一層、分析に幅を持たせることが可能となるであろう。

### 付記

本研究は、科研費（基盤研究(C)研究課題／領域番号 22K00099）の助成を受けたものである。

### 一次文献：

- Philo, “On Dreams”, in: *Philo Volume V*, F.H. Colson and G.H. Whitaker (eds.), Loeb Classical Library, 275, Cambridge, 1934, pp.283-611.
- Philon Alexandrinus, “De somniis”, in: *Philonis Alexandrini Opera Quae Supersunt vol. III*, Paulus Wendland (ed.), Berlin, [1898], 1962.
- Philo von Alexandria, “Über die Träume”, in: *Philo von Alexandria: Die Werke in deutscher Übersetzung Band VI*, Leopold Cohn (hg.), 2te Auflage, Berlin, 1962, S.163-277.
- Philon D’Alexandrie, *De Somniis*, Pierre Savinel (ed.), Les œuvres de Philon D’Alexandrie 19, Paris, 1962.
- Philon Alexandrinus, “De vita contemplativa”, in: *Philonis Alexandrini Opera Quae Supersunt vol. VI*, Leopold Cohn und Paulus Wendland (ed.), Berlin, [1915], 1962 (フィロン『観想的生活・自由論』土岐健治訳、教文館、2004年)。
- Cicero, *De senectute, De amicitia, De divinatione*, T.E. Page (eds.), The Loeb Classical Library, 154, London, London, 1923.
- Posidonius, *Posidonius Volume 1: The Fragments*, L. Edelstein and I.G. Kidd (eds.), Cambridge Classical Texts and Commentaries, 13, Cambridge, 1972.
- Centre d’analyse et de documentation patristiques, *Biblia Patristica: Supplément Philon D’Alexandrie*, Paris, 1982.

### 二次文献：

- Martine Dulaey, *Le rêve dans la vie et la pensée de Saint Augustin*, Paris, 1973.
- Marco Frenschlowski, “Traum: I. Religionsgeschichtlich; II. Altes Testament; III. Judentum”, in: *Theologische Realenzyklopädie*, Band XXXIV, Berlin, 2002, S.28-39.
- Erwin R. Goodenough, *An Introduction to Philo Judaeus*, second edition (New Haven: Yale University Press, 1940; Oxford: Basil Blackwell, 1962) (E.R.グッドイナフ『アレクサンドリアのフィロン入門』野町啓・兼利琢也・田子多津子訳、教文館、1994年)。
- John S. Hanson, “Dreams and Visions in the Graeco-Roman World and Early Christianity”, in: *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, 32, II, Berlin, 1980, pp.1395-1427.
- Yong Lu, “The dream of Pharaoh’s Chief Cupbearer: A response to Philo of Alexandria”, in: *International Journal of Dream Research*, 13-1, 2020, pp.105-109.
- L. Massebieau, “Le classement des oeuvres de Philon”, in *Bibliothèque de l’École des Hautes Études: Sciences religieuses* 1 (1889), pp.1-91.
- Patricia Cox Miller, *Dreams in Late Antiquity: Studies in the Imagination of a Culture*, Princeton, 1994.
- M. Jason Reddoch, “Philo of Alexandria’s Use of Sleep and Dreaming as Epistemological Metaphors in Relation to Joseph”, in: *The International Journal of the Platonic Tradition*, 5, Leiden, 2011,

pp.283-302.

・ M. Jason Reddoch, “Enigmatic Dreams and Onirocritical Skill in De Somniis 2”, in: *The Studia Philonica Annual*, 25, Atlanta, 2013, pp.1-16.

・ James R Royse, “The Works of Philo”, in *The Cambridge Companion to Philo*, New York, 2009, pp.32-64.

・ Kenneth Schenck, *A Brief Guide to Philo*, Louisville, 2005 (ケネス・シェンク『アレクサンドリアのフィロン：著作・思想・生涯』土岐健治・木村和良訳、教文館、2008年)。

・ Celia E. Schultz, *Commentary on Cicero De Divinatione I*, Ann Arbor, 2014.

・ Sofia Torallas Tovar, “Philo of Alexandria’s Dream Classification”, in: *Archiv für Religionsgeschichte*, 15, Tübingen, 2014, pp.67-82.

・ Hanae Tsuda (津田華枝)『「始まり」としてのモーセ — アレクサンドリアのフィロン『モーセの生涯』を中心に』関西学院大学出版会、2015年。

・ Harry Austryn Wolfson, *Philo: Foundations of Religious Philosophy in Judaism, Christianity, and Islam, Volume II*, Cambridge, 1947.

---

<sup>1</sup> 本稿は、第8回「西洋古典学連携共同研究会」（2022年5月14日）において発表した内容を、頂いたコメントや批判などを踏まえて再検討し、部分的に修正したものである。

<sup>2</sup> 第二コリント 12：2 における第三の天に関する記述は、ここに関連付けることは可能かも知れないが、自分自身の見た夢として論じるには不明瞭な部分があり、ここでは例外的な扱いとされるであろう。cf. John S. Hanson, “Dreams and Visions in the Graeco-Roman World and Early Christianity”, in: *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, 32, II, Berlin, 1980, p.1421.

<sup>3</sup> フィロンの聖書解釈に関する著作の分類については、Schenck 及び Royse の研究を参考にした。尚、分類の順序や表現などについては必要に応じて変更している。Kenneth Schenck, *A Brief Guide to Philo*, Louisville, 2005, pp.14-27（ケネス・シェンク『アレクサンドリアのフィロン：著作・思想・生涯』土岐健治・木村和良訳、教文館、2008年）；James R Royse, “The Works of Philo”, in *The Cambridge Companion to Philo*, New York, 2009, pp.32-64.

<sup>4</sup> Frenschlowski は全五巻というエウセビオスの記述を保持している一方で（Marco Frenschlowski, “Traum: I. Religionsgeschichtlich; II. Altes Testament; III. Judentum”, in: *Theologische Realenzyklopädie*, Band XXXIV, Berlin, 2002, S.37）、Tovar は全三巻と見做している（Sofia Torallas Tovar, “Philo of Alexandria’s Dream Classification”, in: *Archiv für Religionsgeschichte*, 15, Tübingen, 2014, p.72）。しかし、いずれかに決定するための材料が十分にあるとは言えない。

<sup>5</sup> 現存する第二巻では、彼は「夢」を表す言葉として「夢 [ὄνειρος]」と「夢のようなもの [ἐνύπνιον]」とを分けており（2,138）、後者には予言的な内容を含まないと見なしている。Cf. M. Jason Reddoch, “Philo of Alexandria’s Use of Sleep and Dreaming as Epistemological Metaphors in Relation to Joseph”, in: *The International Journal of the Platonic Tradition*, 5, Leiden, 2011, p.291.

<sup>6</sup> Philo, “On Dreams”, in: *Philo Volume V*, F.H. Colson and G.H. Whitaker (eds.), Loeb Classical Library, 275, Cambridge, 1934, pp.283-611; Philon Alexandrinus, “De somniis”, in: *Philonis Alexandrini Opera Quae Supersunt vol. III*, Paulus Wendland (ed.), Berlin, [1898], 1962; Philo von Alexandria, “Über die Träume”, in: *Philo von Alexandria: Die Werke in deutscher Übersetzung Band VI*, Leopold Cohn (hg.), 2te Auflage, Berlin, 1962, S.163-277; Philon D’Alexandrie, *De Somniis*, Pierre Savinel (ed.), Les œuvres de Philon D’Alexandrie 19, Paris, 1962.

<sup>7</sup> Tovar (2014), p.78.

<sup>8</sup> 創世記は、イサクが夢を見たことについて明確には語っていない。ただし、夜にヤハウエがイサクに顕れたことについては記述がある（26：24）。本稿では、基本的に眠りや夢と明確に結び付いて記述されている箇所のみを分析の対象とし、それ以外の箇所についての検討は今後の課題としたい。

<sup>9</sup> 尚、フィロンが『夢』の中で取り上げている創世記の以下の夢の箇所は、基となる資料の殆どすべてがヤハウイストではなくエロヒストとなっている（Frenschlowski (2002), S.34）。特に創世記 28 章の箇所におけるヤハウイストの資料は、夢の記述箇所を一切取り

---

除いても、ある程度文意が成り立つように見える。

<sup>10</sup> 尚、この 31 章では、ヤコブだけでなく、その伯父ラバンも夢を見ており、そこでは神が直接ラバンを戒めているように見える (31:24)。

<sup>11</sup> Dulaey は、夢を担うダイモーンの役割との類似点を指摘し、このようなフィロンの考え方を哲学の中に位置付けようとする (Martine Dulaey, *Le rêve dans la vie et la pensée de Saint Augustin*, Paris, 1973, p.114)。他方で、Miller は、天使が人間の魂を天に導く役割を重視している (Patricia Cox Miller, *Dreams in Late Antiquity: Studies in the Imagination of a Culture*, Princeton, 1994, p.61)。

<sup>12</sup> Cf. Harry Austryn Wolfson, *Philo: Foundations of Religious Philosophy in Judaism, Christianity, and Islam, Volume II*, Cambridge, 1947, p.58.

<sup>13</sup> 創世記の中で献酌官は、三日後に釈放された後、暫くヨセフのことを忘れていたが、ファラオが夢を見たことから後に彼のことを思い出し、夢を解釈する者としてヨセフを紹介する。フィロンは、この献酌官を宦官 (ὁ εὐνοῦχος) と見做し、申命記の記述 (23:1) に従って主の会衆に参加できない存在と捉え、否定的な意味合いをもたせている (『夢』

2,195)。Cf. Yong Lu, “The dream of Pharaoh’s Chief Cupbearer: A response to Philo of Alexandria”, in: *International Journal of Dream Research*, 13-1, 2020, p.107

<sup>14</sup> Reddoch (2013), p.13; Tovar (2014), pp.69-70.

<sup>15</sup> Cicero, *De senectute, De amicitia, De divinatione*, T.E. Page (eds.), The Loeb Classical Library, 154, London, London, 1923.

<sup>16</sup> これは神々からの言葉を運ぶダイモーンと理解される。Celia E. Schultz, *Commentary on Cicero De Divinatione I*, Ann Arbor, 2014, p.139.

<sup>17</sup> Cf. Posidonius, *Posidonius Volume 1: The Fragments*, L. Edelstein and I.G. Kidd (eds.), Cambridge Classical Texts and Commentaries, 13, Cambridge, 1972.

<sup>18</sup> 『モーセの生涯』 2,188-191. Cf. Hanae Tsuda (津田華枝) 『「始まり」としてのモーセ — アレクサンドリアのフィロン『モーセの生涯』を中心に』 関西学院大学出版会、2015 年、80-87 頁。

<sup>19</sup> 『夢』 1,62-68. この「場所」概念は、夢の第二類型で、ヤコブがハランに向かう途中で夢を見た場所に関連して議論が展開されている (創世記 28 章)。尚、この『夢』における場所概念の三つの類型については、拙論を参照。『神と場所 — 初期キリスト教における包括者概念』 知泉書館、2021 年、30-44 頁。

<sup>20</sup> Tovar (2014), p.74 の解釈などが当て嵌まる。

<sup>21</sup> ヨセフが『夢』の中で「虚栄心 [κενή δόξα]」をもつなど否定的な文脈で語られるのに対し (2,47)、同じフィロンの著作『ヨセフ』においては政治的に優れた人物として語られる矛盾については、しばしば指摘されてきた。Cf. Reddoch (2011), p.285.

<sup>22</sup> Cf. Goodenough ([1940] 1962), p.143 (グッドイナフ (1994)、225-226 頁) .

<sup>23</sup> Tovar (2014), p.78.

<sup>24</sup> 既に指摘したように、創世記 26 章 24 節は、可能性として排除できないものの、イサクが明確に夢を見たとは言にくい。

<sup>25</sup> したがって、Wolfson (p.58) や Frenschlowski (S.37) は、失われた第一巻で第一の類型として扱われていた夢は、イサクを想定するのではなく、20 章でアビメレク王が見たもの

---

と 31 章でラバンが見たものと考えている。28 章よりも後ろにあるラバンの夢を含むかは判断しにくいものの、聖書箇所的位置的にも内容としても、第一の類型は 20 章のアビメレクの夢を含んでいたと捉える方が自然に見える。

<sup>26</sup> 以下、夢に関する聖書箇所については、Frenschlowski の研究を参照し (S.28-39)、その箇所に該当するフィロンの著作については *Biblia Patristica* を参照した (Centre d'analyse et de documentation patristiques, *Biblia Patristica: Supplément Philon D'Alexandrie*, Paris, 1982)。

<sup>27</sup> Dulaey (1973), p.137. 他方で、Reddoch はフィロンの『ヨセフ』の記述を根拠に、夢の否定的な側面をフィロンが捉えていたことを主張している (2011, p.293)。『ヨセフ』の箇所については、直接的にそのようには読みにくいいため、この点についてはさらに分析を続ける必要がある。

<sup>28</sup> 「古代世界における宗教的資料に基づく夢概念の分野横断型総合研究」(2022 年度・日本宗教研究諸学会連合研究奨励賞による課題) を指す。